

近現代史ゼミに参加して思うこと

近現代史ゼミ・スタッフ 設楽春樹

①近現代史ゼミのこれまで

近現代史ゼミは2000年1月に始まりました。ですから17年が経過し18年目に入ったということになります。通算すると100回は優に超えているはずですが、時には外部の講師をお願いすることもありましたが、ほとんど内藤真治先生が講師を務めました。内藤先生は今年80歳になりましたから、退職して間もなくこのゼミを始めたわけです。教科書を使うわけではなく、内容も資料もすべて内藤先生が準備したもので、100回以上のゼミで同じ内容は一回もありません。そのエネルギーと情熱に頭が下がります。

私は記録係として最初から参加しましたが、実に貴重な学習をさせていただきました。

内藤先生は「このゼミもそろそろ店じまいかな」と言っているのですが、まだまだ頑張っていたきたいと思います。

②内藤先生の歴史学

内藤先生のゼミは、一つ一つの史料を丹念に確認、検証して客観的事実を確定し、それらを総合して、その時代の構造や特徴を明らかにしていくというものです。なんとなく私はこう思う、要するにこうだ、などと抽象化したり単純化したりするのでなく、徹底的に《事実》に語らせるということです。そのため大量の史料が必要になります。それで内藤先生の自宅には大量の史料を保管する書庫があるのです。

さらに内藤史学の特長は、《事実》や《現場》への旺盛な探求心、権力者への厳しい批判、平和や民主主義への強い思い、優れた記憶力と細部へのこだわり、知的好奇心からくる「寄

り道」、歌や声帯模写なども交えた魅力的な語り、そして、内藤先生自身、歴史の傍観者にならず、行動していること、などでしょうか。

③内藤先生と出会った頃

内藤先生と出会ったのは、私が1985年に高崎高校から玉村高校に転勤した時。世間では、地方大学の教授より東大の教授のほうが優秀で「えらい」という感覚を持つ人が多いのと同じで、群馬の高校でも、周辺校の教員より都市部進学校の教員のほうが「えらい」という「常識」があるわけで、私が「玉村高校を希望したのですよ」と言っても、なかなか信じてもらえませんでした。中には進学校の教員のほうが給料が高いと思っている人までいるのです。

内藤先生も長く務めた前橋女子高校から希望して玉村高校へ転勤してきたとうかがいました。玉村高校には、現フォーラム代表の瀧口先生もいて、未熟な私は随分お世話になりました。世間的な印象と現実とは全く異なります。教師としての誠実さ、人間的なレベルの高さということでは、玉村高校の教員集団のほうが高崎高校のそれよりはるかに上でした。私は玉村高校で教育の技術（スキル）ではなく、人間として、教師として大切な姿勢を学んだように思います。

④学生時代に学んだこと

40年以上前の学生時代のことです。大学の自治会室に出入りしていた私は、日本史専攻の先輩から「大状況の中の小状況」という言葉をよく聞かされました。意味は次のようなことです。自分の身の回りの狭い範囲の状況

(小状況)は、そこだけ見ても物事は正確に理解できない。より広い日本全体、場合によっては世界規模の状況(大状況)を見る必要がある。大状況が小状況と密接に関係している。だから大状況をしっかり理解してこそ小状況も理解できる。さらに、現時点の状況だけでなく、時間軸も考慮、つまり歴史的な経過も踏まえて初めて全体が理解できるのだ。

若い学生が随分背伸びした話をしていたものだと思いますが、当時の日本史専攻の教室には家永三郎先生や大江志乃夫先生がいましたから、その受け売りだったのかもしれない。私はぼんくら学生だったので、その意味をあまり重く受け止めませんでした。今になって、そのことの大切さを思い返しています。

高校で社会科を学ぶのは、本来そういう意味があるのだと思いますが、現実の学習はなかなかそうならないし、大体、歴史の授業で近現代史をやらないか、簡単に触れる程度の学校が多いのではないのでしょうか。

⑤近現代史を学ぶ意義

—歴史を逆戻りさせるな—

5月のゼミの案内文で、内藤先生は次のように述べています。「72年前の敗戦後も、なんとかして旧体制を温存しようとする人たちがいました。現在の日本にもそうした考えを受け継ぐ人たちが《歴史を逆戻り》させようとしているように思えます。反動に抗するためには、《事実》を確認する必要があります。」

国民の一人一人が過去と現在の《事実》をきちんと学んで、冷静に自分の頭で考えること。そのことがあって初めて民主主義は健全に機能するし、反動に抗するエネルギーもそこから生まれるのだと思います。

ドイツのヴァイツゼッカー大統領は「過去に目を閉ざす者は、現在に対しても盲目となる」(1985年の演説)という言葉を残しました。味わい深い言葉だと思います。

⑥最近のゼミで学び、考えたこと

1月、3月、5月の最近3回のゼミは太平洋戦争について学習しました。

(1)戦争に向けて科学的・合理的な判断はなぜされなかったのか。

勝算のない戦争はしない。勝算があるにしても、兵士や武器の損害を少なくしながら、効果的な作戦をたてるなど、戦争のプロなら当然考えるべきだと私は思うのです。しかし、日本軍の戦争はそうではありませんでした。

◇勝算はあったのか

- ①日米の生産力、軍事力の圧倒的な差を無視
- ②海軍は分かっていたが!

(永野海軍軍令部総長)天皇に「勝てるかどうか分からない」と奉答。

海軍は戦えないと言えず、強硬な陸軍に引きずられることに。

◇合理的な戦い方ができたのか

- ①陸軍と海軍の連携の悪さ
- ②陸軍の中央は現地軍の既成事実を追認
- ③戦力の無意味な損耗、稚拙で無謀な作戦
兵力の逐次投入・補給の軽視・戦病死者(餓死、病死)の多さ・特攻・大艦巨砲主義・沖縄戦(捨て石)

◇言葉のごまかし

「自存自衛」の戦争、「東亜永遠の平和」、撤退＝「転進」、大本営発表

(2)責任者は誰だ

◇天皇は当初、開戦に消極的でしたが、1945年2月段階では「今一度戦果を挙げなければ」と終戦を遅らせました。

◇天皇は大元帥、つまり陸海軍の最高指揮官でしたが、「天皇は神聖不可侵」(明治憲法3条)であり、法的には無責任(無答責)。

◇ポツダム宣言受諾の遅れ

国民の生命より「国体(天皇中心の政治体制)護持」を重視、その間に広島、長崎に原爆投下、ソ連軍の対日参戦。

◇あの戦争の重大な責任は誰がとったのか。次回以降のゼミで学習します。